
乱反射する少年

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乱反射する少年

【Zコード】

Z5286BA

【作者名】

夢来

【あらすじ】

ある日私は、鏡の中に『少年』が『見える』ようになった。気味の悪い少年は、いつでも薄笑いを浮かべて私を見る……。

数年前、私は事故で両親を亡くした。その時の私はまだ高校を卒業したばかりで、成人もしていなかつた。

両親が死ぬ瞬間を、私は目の前で見てた。今でも鮮明に思い出せる。

あれは、近くのスーパーへ買い物に行つた帰り道だつた。お父さんとお母さんは、道横断歩道を渡ろうとしてたんだ。

信号機のランプが赤から青に変わつて、二人はアスファルトの上のゼブラを踏み出した。そして真ん中あたりで歩みを止めて、こちらを振り返つたんだ。

横断歩道を渡る手前で、私がほどけた靴紐を結び直してたから。今思えば、お父さんもお母さんもそこで立ち止まらなければよかつたの。私が靴紐なんて気にしなければ、よかつたの……。

「早く」って声が聞こえて、顔を上げて立ち上がつた時、物凄い勢いで私の鼻先をつむじ風が掠めた。

何だか鈍い音がして、すぐに甲高いスリップ音が聞こえた。行き交う人々のがやがやとした喧騒が一瞬だけ止んで、「きやあああああ！」って叫んだ誰かの悲鳴で、再び始まつた狂騒はよりいつそう騒がしくなつた。

そんな中、信号機のスピーカーから流れる『とおりやんせ』の曲だけが、私の耳には酷くやかましく響いてた。

いつの間にか足元に転がつていた大型トラックの鏡片。その中で、『誰か』が笑つてた。

その日からだ。私は鏡の中に『少年』を見るよになつた。

何かの比喩とかじやないよ。

お父さんとお母さんの事故の翌日、朝起きたら鏡の中にはず

のない少年の姿が見えたの。私のすぐ左隣に、前髪がうんと長い男の子が立っていた。

びっくりしたよ。もしかしたら叫んでたかもしね。

私の肘の辺りの背丈でね、歳は七つか八つくらいに見えた。

口元をにやりと歪ませて、鏡越しに私を見詰めてたんだ。

ぎぎぎ……って効果音が付きそうな感じで首を左に回したり、実際私の隣には壁しかなかつた。

すじく怖くてね、数日は布団を被つて過ぐした。なるべく鏡も見ないようにしてね。だつて、前日にトラックの鏡片の中にいた『誰か』と、その少年は一緒だつたんだもん。

そうじゃなくても、突然そんなの見えるようになつたら誰だつて怖いよ、きっと。

布団に潜りながら、病院に行こうかとも考えたけど、結局行かなかつた。鎮静剤とか射たれて薬いっぱい出されても困るし。

どこか頭は冷静で、その少年が幻覚とかじやなくて幽霊の類いだつていうのが分かつてたつてのも、理由の一つかもしれない。……まあ、幻覚を見る人はみんなそう思つんだろうけど。

それから数日後、私は普通に仕事に行けるようになった。

ちょっと慣れたんだよね、少年が見えることに。気味は悪いけど、見えるだけで彼は何もしてこないし、「だつたらいつまでも寝てられない」って、吹っ切れた節もある。

彼はどこにいても見えたけど、（例えば化粧用のコンパクトミラーの中とか、会社のトイレの鏡とか）とにかく、両親が死んで私は『鏡の中に入る少年』が見えるようになつたつてだけの話。死を目の当たりにして靈感が目覚めたつて言うのかな。

そう思つてた。半年前の……「うん、数分前までの私は。

ざわざわと、人々がさざめき合つてゐる。

トラックに女性が一人撥ね飛ばされたから。歩行者用の信号は堂々と赤なのに、その女性は踊るように飛び出して行ったから。

他人事みたいに言つてゐるけど、飛び出したのはもちろん私。

もう自分が痛いのか何なのかさえも分かんないけど、眼前に広がる血の海を見れば、救急車到着前に私の命は事切れるんじゃないかなって思う。

自殺なんかじゃないよ。押されたの。人に、背中を。

揺れる視界の中、顔のすぐ横に転がる鏡片に、あの少年が写つてた。いつもの薄気味悪い笑顔で、私を見下ろしていた。

ぼんやりと霞む意識の中、それでもどこか頭は冷静で、彼は『鏡の中にある』んじゃなくて、『鏡を通してしか見ることができない』んだなって、理解した。

彼は、いつでも『いた』んだ。私のすぐ隣に。

刹那、背中に氷水を流されたみたいにぞつとしたけど、すぐに視界は暗転した……。

(後書き)

『見えてる』だけだと思っていたものが、実はそこに『いた』といつ事実を理解した瞬間つてすぐ怖いんじゃないかと思います。

例えば、冷蔵庫の裏からカサカサと音だけが聞こえる。それは『聞こえている』だけ。しかしその隙間から黒光りするアイツが長い触覚を現したりしたら……それは『いる』といつ事実。

……いや、この例えはちょっと違う。だが怖い。怖いよ。

この話は全てフィクションですが、もしかしたらあなたの家にも以上後書き、夢来でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286ba/>

乱反射する少年

2012年1月14日17時47分発行